地域で生活する障害者を応援する
「からしだね館」の旬な情報をお届けする機関誌

からしだね通信

VOL.53
2020 7

目次

1. 巻頭言
2~3. ワークス報告
4. センター報告
5. マスクプロジェクトのご報告
6. マスクプロジェクトのその後
7. ミッションからしだねの願っている未来図

「距離」について

理事長　坂岡隆司

前回の「からしだね通信」は、４月初旬、コロナの感染拡大が勢いを増す中で、緊急臨時号として発行させていただきました。コロナ禍もパンデミックという新しい形の「災害」だととらえた時、私たちも何か行動を起こさねば、と考えました。その一つの取り組みが、医療機関にマスクを届けよう、というマスクプロジェクト（のちにガウンプロジェクト）でした。

多くの皆さまのあたたかいご協力をいただき、たくさんのマスクや防護ガウンを医療機関や介護施設に届けることができました。ご協力に心より感謝申し上げます。

コロナ禍は何を私たちに教えているか、と考えます。私たちの社会はどう変わっていくべきか、と。皆さん、今回ほど「距離」について考えたことはなかったのではないでしょうか。世界がグローバル化して、これほど「近く」なった今の時代。人も国も民族も。そして宗教も経済も文化も。ただ、その中身、その実質は果たしてどうなのか？と、あらためて問われたのではないか、という気がしています。

「世界がぜんたいに幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

いまから百年ほど前、東北岩手の大地に立って、宮沢賢治がこう言いました。

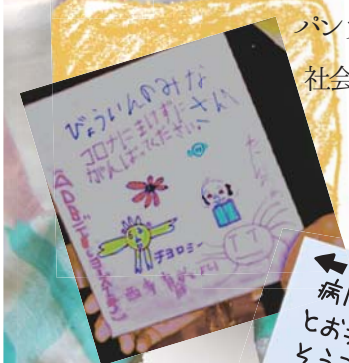
全体が、というとき、それは遠い国で生きている貧しい人々のことも、そして、今も私たちの「隣」にいる、声を出せないでいる一人の人のことも含まれています。

じつは、昨年秋より、からしだねでは、OBJ、CWS（＊）という、いつも災害支援で活躍されているNGOとチームを組んで、「市民ソーシャルワーカー育成プロジェクト」という取り組みを進めていたところでした。災害時、一般市民がボランティアで被災地支援にあたるさい、そこに〝ソーシャルワーク〟の視点を取り入れることが必要、という発想です。

３者協働でガイドブックも制作しました。人としての尊厳、つながりの大切さ、相互的対等な関係などを肝にした、手前味噌ですが、とても分かりやすいガイドブックです。（＊＊）

パンデミックという災害時、人と人の物理的な距離が離されるこうした時こそ、人を生かし、社会を守るのはやはり人なのだ、とつくづく思う次第です。

＊ OBJ : Operation Blessing Japan (NPO) / CWS : Church World Service (NPO)
＊＊ 参考『災害時 あの人をたすけたい―あなたの町・コミュニティの 市民ソーシャルワーク実践』
2020 年 3 月 31 日発行（発行：「市民ソーシャルワーカー」
育成プロジェクト、著作：社会福祉法人ミッションからしだね）
お読みになりたい方は、ミッションからしだねまでご連絡ください。



病院の皆様へ、とお手紙を頂いたそうです。

▲堀川病院にお届け

ワークス報告

2020年が明けて早6ヶ月が経過しました。この間の変化は皆様それぞれに実感しておられることと思います。当初は新型コロナウィルスの影響がこれほどまでに広がるとは考えていなかったことですが、今では世界の日常を大きく変えてしまっています。

主任 鍋島愛信（社会福祉士）

これまで、就労支援事業所からしだねワークスでは「仕事」をキーワードとして、自分の生活や人生を考え、病気や障害との付き合い方、自分にとっての自立を模索し、他者とのコミュニケーションを改善させ、できるだけ家を出て自分の役割とそれに伴う責任、社会人としての在り方等を意識して、時にはぶつかり合ったり励まし合ったり、元気をもらったり落ち込んだり、お互いに様々な刺激を受けながらも、それぞれに目標を定めて日々の作業に取り組んできました。

月に1度（第3木曜日）は対外的なお休みを取り、全体ミーティングに集まり、他者との交流を持ち、チームで話し合い、集まっていろんな話や議論を深めることから自分を知り、他者との違いを認め、折り合いを付けながら協働することを繰り返して来ました。

4月初旬、緊急事態宣言が発令されてから、ワークスの利用形態もガラッと変わりました。公共交通機関を使って来所している方は基本的に在宅ワークに切り替え、近くに住んでいる方は徒歩または自転車・バイクでの来所に切り替えてもらいました。

家を出て仕事をしたい利用者さんはたくさんおられ、家での時間を持て余し、生活リズムが崩れたり、人との交流が無くなることへの不安と同時に感染の不安も抱えて、やり場のない、出口の見えない怖さを感じつつ過ごす日々が始まりました。

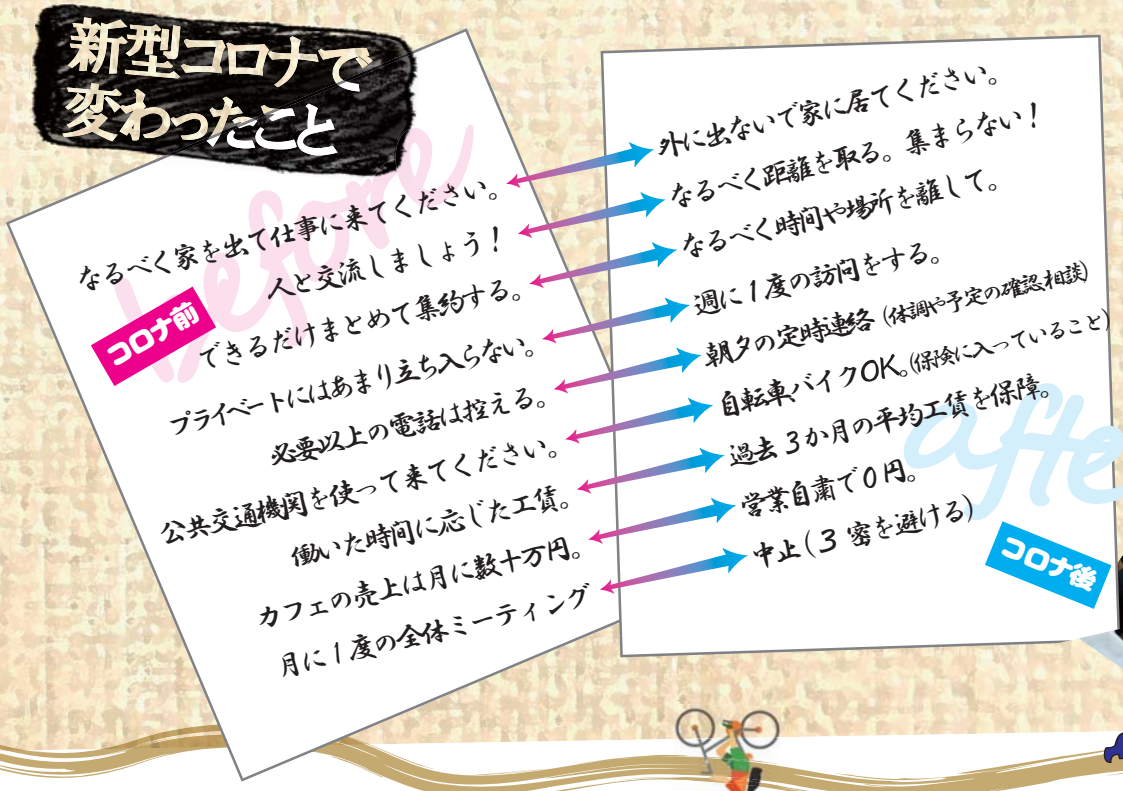
職員の動きも大きく変わり、在宅支援に伴い必要となる記録のための書類の準備や記入、訪問の調整、仕事の割り振り、連絡調整、不安や混乱を和らげるための電話相談などの対応をこなして来ました。

4月8日からはカフェ・トライアングルの営業を自粛しました。これは感染拡大防止の一環であると同時に、B型の就労支援事業として京都市からの委託で行っている配食サービスを継続させるためのリスクコントロールでもありました。おかげさまで今日に至るまで配食サービスを休むことなく、地域のお一人暮らしの高齢者にお昼のお弁当をお届け続けることができました。

しかしカフェは1ヶ月数十万円の売上がゼロ、社会の動きが無くなっていくに伴い他の仕事も減っていきました。

個人も事業所も否応なしに変化に対応していかなければならない状況に置かれていきました。以下、新型コロナ前後での変化、違いを少しまとめてみました。

新型コロナで変わったこと



緊急事態宣言が解除され再開に際してアンケート

緊急事態宣言が解除されて少しずつ動き始めていますが、再開に際してアンケートを取りました。その中で **①在宅生活で苦しかったこと 不安だったこと 辛かったこと ②良かったこと 新しい発見 いい方に変化したこと** をお聞きしたところ、以下の回答がありました。

①在宅生活で苦しかったこと、不安だったこと、辛かったこと

- 感染への不安が大きかった
- 社会とのつながりが断たれたように感じた
- 家族への対応
- 体が鈍った・運動不足
- 在宅生活に慣れて元の生活に戻れるか不安
- 家族以外と話す人がなかった
- ワークスに来る前の生活を思い出して嫌だった
- 人と接していないことによる悪い面がいろいろ感じられた
- 外に出られないストレス
- 孤独だった
- 在宅での仕事がうまく進むか不安だった

②良かったこと、新しい発見、いい方に変化したこと

- やれば慣れてくる
- 自分で考え、工夫したり行動するようになった
- 他の人がいないので集中できた
- 変えていければ自信になると思えた
- 趣味の腕前が上がった
- 料理のレパートリーが増えた
- 自分の状況が恵まれている事に気がついた
- みんなが気にかけてくれた
- 家事を手伝うようになった
- 仕事に集中できた
- 訪問の時や電話での職員とのやり取りが楽しかった
- 他者とのストレスなく過ごせた
- ゆっくり過ごせた
- 外出が減り無駄遣いが減った
- 体調や体力が整えられた
- 自分の現状を見直す機会になった

当初、見えない新型コロナは私たちを恐怖と不安で覆い、他者との間に心理的・物理的な距離を作り、分断を起こし、孤独を呼び込んだように思います。でも、新型コロナがもたらしたものはそれだけだったのでしょうか？

ワークス利用者のアンケートにもありましたが、マイナス面だけではなくプラスの面にも気付く機会となっていることを実感します。新型コロナによって生み出された状況により、浮き彫りになってきた様々な社会の歪み、貧困、格差、声を上げる術を持たない弱者の存在など、当たり前に過ごしていた日常がこんなにも脆く崩れてしまうのに愕然としました。

でも次々と現れる、困難に立ち向う人たち、優しい気持ちを行動に移す人たちもたくさんいることに励まされます。

からしだねワークスの就労支援という働きの中でも、本当に大切なもの、大切なことに気づき、見失わないようすること、自分（たち）にできることを行動に移していくことを利用者さんと共に取り組んでいきたいと願っています。

どうぞ引き続き、からしだねワークスの働きに注目し応援してください。

センター報告

二〇二〇年も半分が過ぎました。新型コロナウィルス一色の毎日です。からしだねセンターの業務も、大きな変化の中を通り、いろいろなことを考えています。今日はそのうち二つを取り上げ、みなさんとシェアさせていただきたいと思います。

主任　武山世里子（精神保健福祉士）

アウトリーチ（訪問）だからこそできること

私たちは、地域で暮らす当事者の、その「暮らし」をサポートします。相談を受け、暮らしの現場である、自宅、職場、福祉の事業所、そんなところを訪問して、そこで何が起こっているのかを聞かせてもらいます。このコロナによって、訪問ができなくなりました。もちろん電話やメールで相談をお聞きし、必要に応じてサポートをしていました。けれども、これほどまでに、訪問からたくさんの情報を得ていたことかと思い知りました。

表情、息づかい、お部屋の様子、臭い、服装、髪の毛や髪の伸び具合…

このような情報はもしかすると、ご本人とお話するくらい、時にはそれ以上に、私たちにご本人のその時の状況やSOSの必要性を伝えてくれるものなのかもしれません。

訪問でしかどうしてもキャッチすることのできない当事者のSOS。

今後もずっと付き合い続けるしかないコロナ禍で、感染しない、感染させない対策をしながら、アウトリーチを継続していきます。

誰が障害者なのか

からしだねセンターで相談をお受けしている方々は、「障害」のある方です。主に、精神障害、身体障害、知的障害のある児童と成人の方々です。障害者手帳の有無に関係はありませんが、障害福祉サービスの対象になる方がほとんどで、たいていの場合で医療・福祉の関係者や行政の関わりがあります。

ご高齢で、地域での暮らしに何らかのサポートが必要な方は、地域包括支援センターや介護保険事業所の専門職がその方々の個別の事情に応じて、必要な支援を調整しています。

経済的にお困りの方には、生活保護などの制度があります。

しかし、このコロナ禍で、こういった福祉のセーフティネットにさえ引っかかってこない方々がいることを、あらためて知ることになりました。

日雇い労働が少なくなり、それで食いつないでいた人たち（外国人を含む）が働けなくなりました。

住む家を追われ、ネットカフェで寝泊まりをしていた人たちが、ネットカフェの自粛要請で、ネットカフェ難民にもなれなくなりました。

風俗産業で何とか生活を維持していた女性たちがその風俗でも仕事ができなくなっていると聞きました。

これらの人たちの中には、じつは軽度の知的障害者や精神障害者も少なくないとのことです。

今まで、福祉のセーフティネットからこぼれ落ちている人達は、別の「粗悪なセーフティネット」に引っかかりながら、なんとか生活をしてきました。けれどもこのたびのコロナウィルスは、「粗悪なセーフティネット」まで取り去ってしまいました。社会は、このような人たちの現状を、どこまで把握しているのでしょうか。「自己責任」というひと言で、片づけてしまっていないでしょうか。コロナ禍で出会ってしまったこれらの方々も、私たちの社会では、「障害」のある人たちなのではないでしょうか。

コロナ禍の中の支援センターで仕事をしながら、あらためて「障害」について考えさせられています。

「新品の使い捨てマスクを、医療現場に寄贈していただけませんか？かわりに、コーリンクリップを利用したマスクキットを差し上げます」という「からしだね通信緊急臨時号（２０２０年４月１０日発行）」の呼びかけに対して、たちまちのうちに続々とマスクと寄付金（オペレーションブレッシングジャパンさんからは助成金）が寄せられました。

ガウンプロジェクト継続中!!
郵便振替
00970-2-222380
社会福祉法人ミッションからしだね後援会

わずかな手持ちのマスクを差し出してくださった方、家にマスクはないけれど…と寄付金を寄せてくださった方、その優しさ、思いやり、善意に触れさせていただき、取り次ぎをさせていただいた私達が、一番しあわせをいただいたように思います。本当にありがとうございました。

「マスクプロジェクト」のご報告

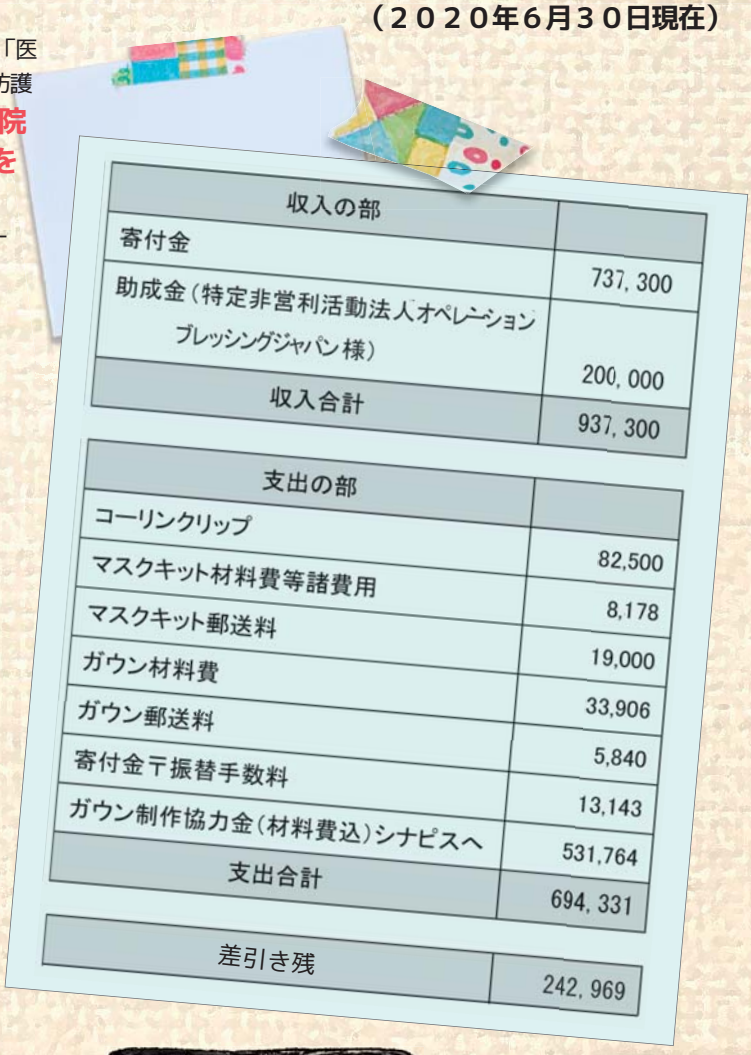
（２０２０年６月３０日現在）

集まったマスクは、2,323枚です。

使い捨てマスクも少しずつ出回るようになってきましたので、みなさまの「医療現場に役立ててほしい」というお気持ち（寄付金）は、不足している防護ガウンを補うために、**ポリエチレン製のガウンを作って、病院や介護施設にお届けする「ガウンプロジェクト」と名前を変えて、継続させていただいております。**

なお、医療用ガウンの製作には、カトリック大阪大司教区社会活動センターシナピスに、ご協力をいただいております。

（＊「シナピス」については、６ページで）



収入の部	
寄付金	737, 300
助成金（特定非営利活動法人オペレーションブレッシングジャパン様）	200, 000
収入合計	937, 300

支出の部	
コーリンクリップ	82,500
マスクキット材料費等諸費用	8,178
マスクキット郵送料	19,000
ガウン材料費	33,906
ガウン郵送料	5,840
寄付金〒振替手数料	13,143
ガウン制作協力金（材料費込）シナピスへ	531,764
支出合計	694, 331
差引き残	242, 969

寄贈・寄付をしてくださった皆様（敬称略）

宇治写真倶楽部写遊人（京野隆之） 株式会社エナテクス（福井利明） かばくんの家（出村紫野舞） 木山教会（小田真由美） KYOTO泉チャーチ（李忠奎） 京都市醍醐・北部包括支援センター（後藤亮太） 西寺育成苑 京都福祉サービス協会（種田眞理子） 陽だまりクラブ共同作業所一同 やましなの里（津田尚子） 青木秀次 青木理恵子 赤澤玲子 浅野純江 池田孝嘉 市川祐喜子 一木訓治／茂子 井上京子 今福秀子 岩井邦子 岩田吾朗 江口真理／広美 榎本貴夫 大兼久芳規 岡美智代 奥野英子 奥野泰孝 小原辰也 表順子 梶村慎吾 加瀬裕子 勝本博子 兼松哲夫／好子 川合くみ子 河原良治 岸川萌木 岸野誠 北村榮一／圭子 北村洋 北村優子 北山繁美 北山忠生 木場田幸子 倉信範子 近藤栄 斎藤謙次 坂岡大路／未来 坂岡隆司 坂岡恵 佐竹保雄／紀美子 佐野弘子 莎原茜 鹿間智子 柴田珠江 島田喜代子 下村達矢 杉野男 鈴木有 砂川和世（他２名） 砂川晋治 砂川孫四郎 砂川祐司 諏訪友美香 田上三郎 髙矢祐子 武山忠弘 多田出佳代子 田中美由紀 谷口郁夫 玉田貞子 田村久子 椿栄 寺井直江 徳田恵理子 戸谷芳朗 永井滋 中川慶子 中村武子 中村博子 奈倉道隆 那須佳子 鍋島愛信 西川加世子 西村隆 野崎康明／泰子 野田秀 野村武夫 波戸辺のばら 花見眞弓 林貞子 原口熱美 平越真澄 広岡貞之 深谷与那人 福田紫苑 藤田明子 藤田千佳子 古市洋 不破紗綾子 坊野真子 本多円了／倫子 前田ケイ 松井孝典 松栄純子 松田和代 松村里美 松本聡子 松本裕史 松本美穂 馬庭京子 三木国恵 三谷洋子 宮崎和子 宮﨑美枝 宮崎佳文 三好徳昌 森川恵子 森本敦子 八木正隆 谷内文子 山崎春幸 山下愛子 山本智世 山本真実 山本優樹 山本裕子 吉川潤一／啓子 吉田功 李善恵 和田早智子 匿名希望６名

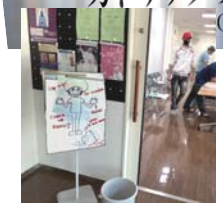
（合計146名） グループのご寄付も１名として数えています

【マスクお届け先】

日本バプテスト病院
京都民医連あすかい病院
京都鞍馬口医療センター 他

【ガウンお届け先】

堀川病院
京都民医連あすかい病院
福井赤十字病院
京都鞍馬口医療センター
うえに生協診療所 北大阪病院 宇治病院
グループホーム北白川 長楽園短期入所生活介護事業所
宇治おうばく病院 社会福祉法人フジの会
アビイロード山科 (株)ヤサカ京都支店
特別養護老人ホームそらの木 浅香山病院
ゆるり高安 託児託老・派遣サービス green 他



ペイフォワード
pay it forward

マスクプロジェクトが一段落し、みなさまのお気持ちのこもったご寄付を、医療現場に届けるにはどうすればよいかを考えていたときに、次のような流れがうかびました。

① 医療現場を支えたいという人達の気持ちが寄付金となる。

② ポリエチレンの医療用ガウンを作って、病院や介護施設を支える。

③ その作り手は、コロナ禍で経済的に厳しい状態に陥った方々であること。

④ 作り手は、ガウン制作の協力金を得ることで、自分の生活を支え社会での役割を実感。

この流れには、③のガウンを作ってくれる人が必要です。そういう人を探していた時に、カトリック大阪大司教区社会活動センターシナピスと出会いました。シナピスは、難民や海外ルーツの方々を支援しているＮＧＯです。

コロナ禍で、日本にいる外国ルーツの方々がひどく困窮し、最後の頼みの綱として、カトリック教会を頼ってこられるのだそうです。中には三日間水だけを飲んでしのいだと言う人もおられたとのこと。先日、作業の様子を見学しました。ぴかぴかに掃除された広い部屋で、頭髪が落ちないようにキャップをかぶり、手袋、マスクで徹底的に衛生管理をしながら、とても丁寧に作業を進めておられました。このガウンが医療現場で働く人たちを守るんだ、というお一人お一人の意気込みのようなものも伝わってきました。ちょうど、その場に病院の方が来られ、「ガウンの提供を受け、現場がどれほど助かったか」ということを伝えておられました。みなさんの顔がより一層輝きました。

「ペイフォワード（Pay it forward）」というアメリカの映画があります。ある人から受けた厚意をその人に返すのではなく、別の人へと贈っていく。その連鎖が、社会を変える―そんな内容でした。福祉であたりまえに使われている「支援」という言葉ですが、「支援」もじつは、一方通行のものではなく、先贈りされていくものであってほしいと願います。なぜなら、一方的に支援を受け続ける側にいることは、人のこころを傷め弱めてしまうからです。支援を受ける側が、今度は他の誰かを支援する側に回る。方法はいろいろあります。コロナ禍の今、そういう風通しのよい、支援の輪を広げていけたらよいなと思います。

緊急のお願い!!! 生活困窮者を支えるため お仕事募集!!!

新型コロナ禍以前から困窮状態だった人たちがとても厳しい状況になっています！！

・家がないネットカフェ難民→ネットカフェの自粛・廃業により、行き場を失いました。

・難民や外国人技能実習生→雇用先が破綻したり解雇され職を失いました。コロナで母国にも帰れない状態。帰りのチケット代もありません。働きたい、働けるのに働けない状態になりました。

・元々風俗業界には障害や病気、社会的に排除された女性が少なくありません。コロナによる自粛から、その人たちの仕事がなくなりました。（彼女たちは大っぴらに声をあげられないでいます。）

・失業と同時に、寮などの住む場所も失う人がいます。

まずは、からしだねにご相談ください。どんな仕事でもかまいません。
からしだねがマッチングします。
働けるのに働けない、住む場所がない
そのような生活困窮者を「仕事」で支援してください。

仕事の具体例：データ入力、チラシや機関紙の印刷、宛名ラベル貼り、封入作業、縫製作業、体力仕事、いろんなお手伝いができます。

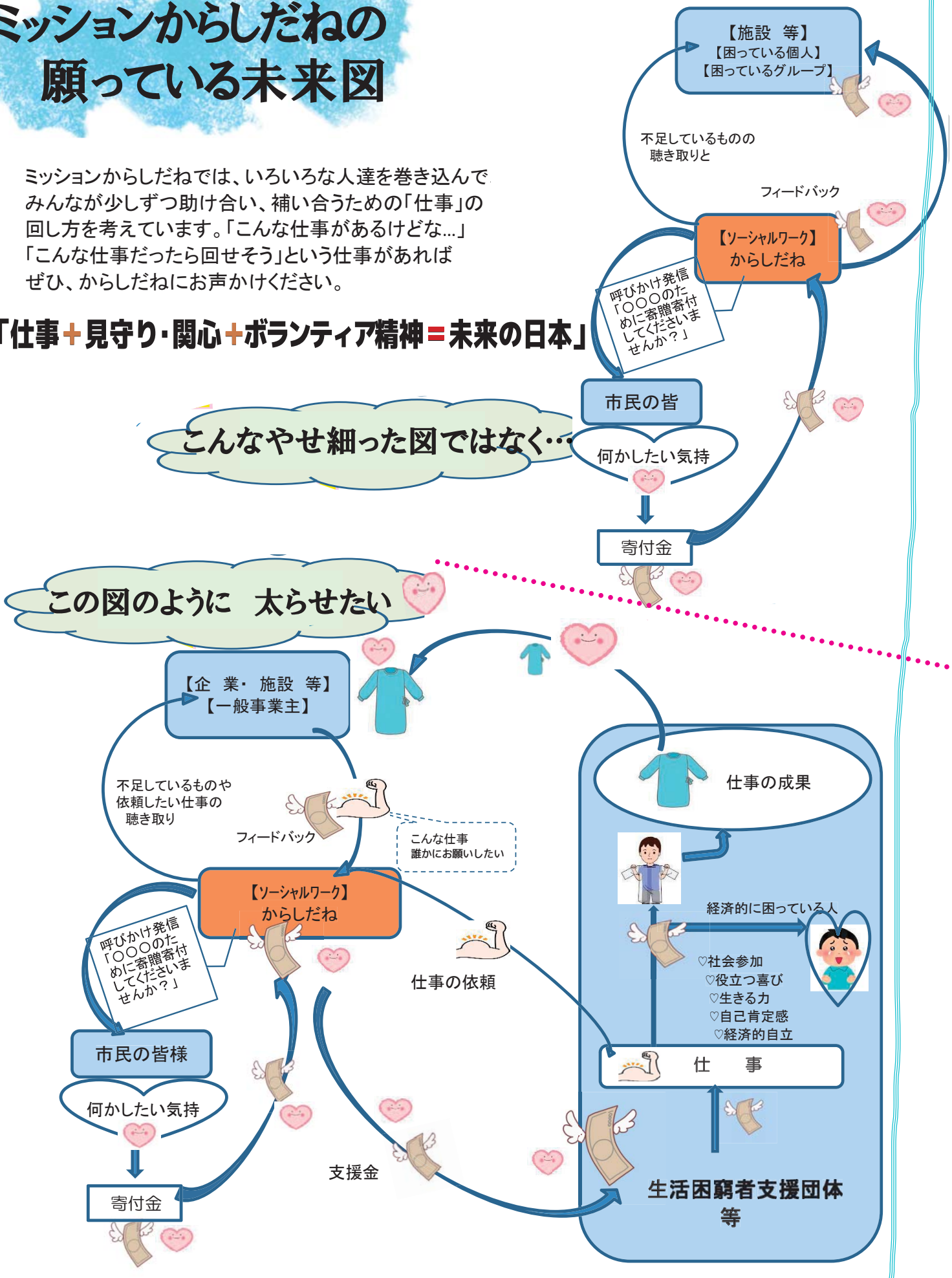
こんなんできる？とお問い合わせください！

TEL 075-574-2800
FAX 075-574-0025
Mail works@karashidane.or.jp

ミッションからしだねの願っている未来図

ミッションからしだねでは、いろいろな人達を巻き込んでみんなが少しずつ助け合い、補い合うための「仕事」の回し方を考えています。「こんな仕事があるけどな…」「こんな仕事だったら回せそう」という仕事があればぜひ、からしだねにお声かけください。

「仕事＋見守り・関心＋ボランティア精神＝未来の日本」



2020 JULY 53号 2020年7月6日発行 編集／社会福祉法人ミッションからしだね 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町75 TEL.075-574-2800 E-mail:info@karashidane.or.jp URL:http://www.karashidane.or.jp

「社会福祉法人ミッションからしだね」は、地域で暮らす障害者の福祉はもとより、社会の様々な課題に積極的に取り組んで行こうとしています。後援会はこの働きを支えることを目的としています。ぜひ後援会にご協力ください。からしだねの機関誌の他、カフェ・トライアングルの情報、催し物のご案内などをお届けします。

(2019.12~2020.5)

≪ご寄附者≫

ノートルダム教育修道院 様
弓削恵則 様
伊東博 様
出村紫野舞 様
藤井茂 様
浜岡典子 様
さくら会 様
坂岡恵 様
鍋島愛信 様
インマヌエル京都伏見キリスト教会 様
鈴木有 様
株式会社エナテクスサービス 様
松盛澄男 様
京都復興教会 様
CIF ジャパン 様
宮崎佳文 様
松田和代 様

≪助成金≫

特定非営利活動法人オペレーション・ブレッシング・ジャパン 様
特定非営利活動法人 CWS Japan 様

≪後援会 ご支援ご協力者≫

万が一、ご一報くださいますようお願いします。もれがございましたらよろしく

みたまキリスト教会 様
藤田明子 様
表順子 様
山本千鶴 様
レディースメンタルクリニック一粒の麦 山本裕子 様
榎本貴夫 様
李善恵 様
宮崎佳文 様
本田清実 様
浅野純江 様
梶村慎吾 様
宮島昇 様
生川鉄平 様
青木秀次 様
森本典子 様
ヌヴェール愛徳修道会 様
川合くみ子 様
山本智世 様
原潔 様
吉田功 様
小柴順子 様
千井學 様
田上三郎 様
藤野美弥子 様
島田喜代子 様
中村博子 様
山本真実 様
松井孝典 様
砂川祐司 様
匿名 様

いつもご協力いただき、ありがとうございます

後援会にご協力ください

年会費
個人様 1口 3,600円
団体様 1口 10,000円

会費振込先
郵便振替
口座番号：００９７０-２-２２２３８０
加入者名：社会福祉法人ミッションからしだね 後援会

後援会入会・継続には、同封の振込用紙をご利用ください。

寄付金控除領収書をご希望の方は、振込用紙の通信欄に「寄付用領収書希望」とお書きください。

※既にお振込みいただいている会員様は、お見過ごしください。

「災害時 あの人をたすけたい」

あなたの町・コミュニティの『市民ソーシャルワーク』実践」

著作 社会福祉法人ミッションからしだね

発行「市民ソーシャルワーカー」育成プロジェクト事務局

075-574-2800
被災地支援のため、1冊500円のカンパをお願いいたします

市民ソーシャルワーカー育成プロジェクト Citizen Social Worker Development Program

CWS JAPAN Church World Service actalliance 特定非営利活動法人 CWS JAPAN

OPERATION BLESSING 特定非営利活動法人 オペレーション・ブレッシング・ジャパン

Karashidane 社会福祉法人ミッション からしだね 社会福祉法人 ミッションからしだね

6 自己決定の原
相手が、こうしたい、こう
励まします。相手が自分で
お手伝いをします。具体的
いくつか教えてあげることも、

相手は、あなたを信頼して話し
相手の許可

被災者とかかわる際に心がけたい「７つの原則」を、実際にここ数年に起こった災害時の事例を紹介しながら制作したガイドブックです。コロナで直接会えなくても、電話で、メールで、被災された方とどんなふうにかかわっていけばよいか、このガイドブックを参考にしていただければと思います。ご希望の方は、ご連絡ください。

みなさまのこころとからだの健康が保たれますように…。

（編集後記）

からしだね通信編集の最終段階に入ったときに、九州南部の豪雨災害が起きてしまいました。被災されたお一人お一人に、心よりお見舞い申し上げます。コロナ対策をしながらの大規模な被災地支援は、日本に住む私達にとって初めてのことです。一番被災者に寄り添いたいときに、それができないもどかしさを抱えながら、それでも私達に何ができるのかを考え続けたいと思います。ミッションからしだねでは、さっそく、他機関と連携を取りながら、被災地にある福祉施設の「今、必要なもの」の情報収集を始めています。 [M.S.]

次号は2020年12月の予定です！